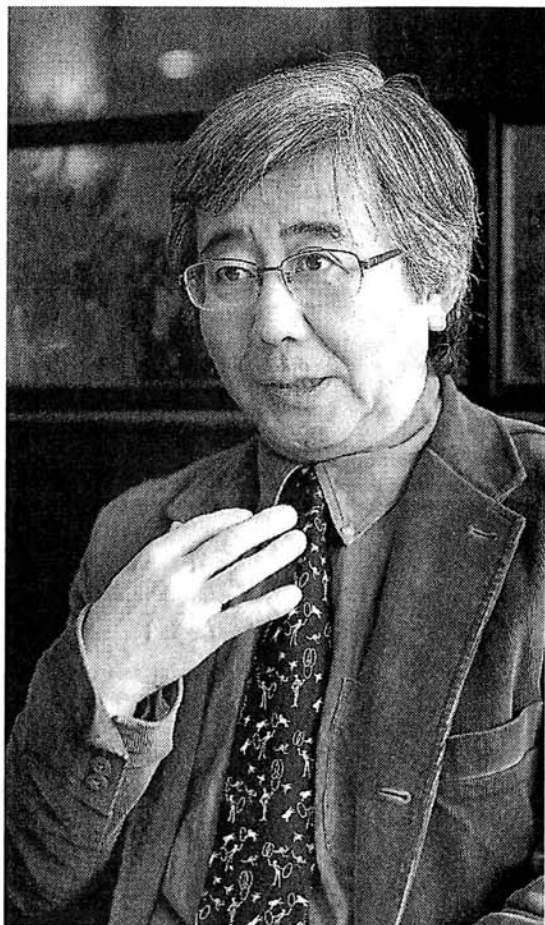


■サーカスは私の〈大学〉だった

大島 幹雄さん(59)



世界中につながる小さな扉

ロシア語の〈先生〉はクマだった。1979年6月、新潟空港に着いた飛行機のタラップで、クマが後ろ脚だけで立ち、ポーズを取った。ポリシヨイサーカスの来日公演だ。大学のロシア文学科を卒業したばかりの大島さんは、5頭のクマに乗せたトラックの助手として45都市を回った。読むことはできたが、話せ

著者に会いたい

なかったロシア語で、餌の手配のために調教師とやり取りするうちに、会話も通じるようになり、舞台での芸人の真剣さにひかれていった。3カ月後、一行が横浜港から帰国する夜、大棧橋の近くで飲みながら待っていると「荷積みが始まりますよ」と、知らされた。クマが檻(かご)と積み上げられていた。号泣した。

「もう二度と会えないと。このとき私は、一度入ると出られなくなるという、サーカスの『魔法の輪』に入ってしまったのかもしれない」
世界各地のサーカスを日本に呼びつつ、学生時代から興味があったロシア・アバンギャルドについて調べ始めた。20世紀初めの若い詩人や演劇家は、サーカスが娯楽として持つ力を使い、精神の革命まで含む芸術運動を展開した。その夢と挫折を一人の道化師の人生と重ね、最初の本『サーカスと革命』にまとめた。

それから二十数年、プロデューサー業と執筆活動が続けてきた。今回の本は、楽しみながら書いた回想録だ。学んだことを本当に自分のものにする〈大学〉がサーカスだった。「サーカスの扉は小さいですが、世界中につながっていて、つねに新しい人との出会いがある。それは大きいですよね」

自らのブログは「クマのデラシネ日誌」〈先生〉への思いが込められる。
(こぶし書房・1890円)

文・石田祐樹 写真・伊ヶ崎忍